Architectural Institute of Japan

日本建築学会大会学術講演梗概集
（関東） 2006年 9 月

ファサードと用途から見た街路空間の変容
－新潟市古町通連続立面写真の比較分析－

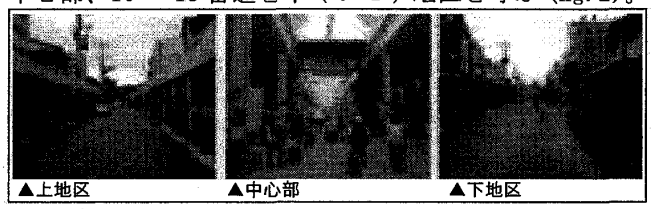
正会員 ○巨亮＊
同 岩佐明彦＊＊
同 川村成正＊＊＊

キーワード： 街路空間 ファサード 連続立面写真 街の変容

1. 背景と目的 本研究で対象となるのは新潟市古町通である。古町通は古くから新潟市において商業の中心として栄えてきた。しかし、大型商業店舗の郊外進出や自動車に依存した生活の影響から街の空洞化が浮き彫りになっている。一方では空洞化問題に対し地域毎に様々な取り組みを行い、活路を見出そうとしている。

このような背景のもと、古町通では様々な変化が起こっており、特に店舗の用途変化に伴い、街の表情ともいえるファサードの変化が生じている。本研究では古町通りを対象に、街路を構成するファサードと用途に注目し、街路空間の変化の傾向を捉えることが目的である。

2. 古町通概要 古町通は道に沿って建物が並び、1番通から13番通まで続く全長約2kmの街路である（fig. 1）。本研究では1ー4番通を上（カミ）地区、5ー9番通を中心部、10ー13番通を下（シモ）地区と呼ぶ（fig. 2）。

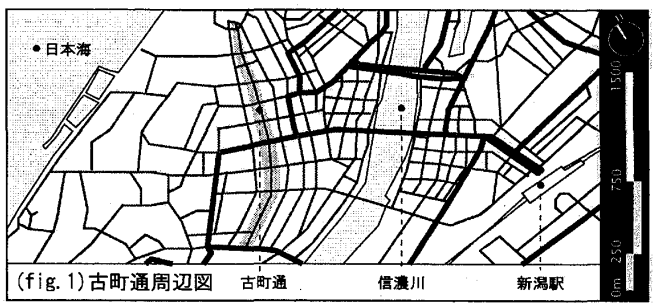


(fig. 2) 古町通の様子

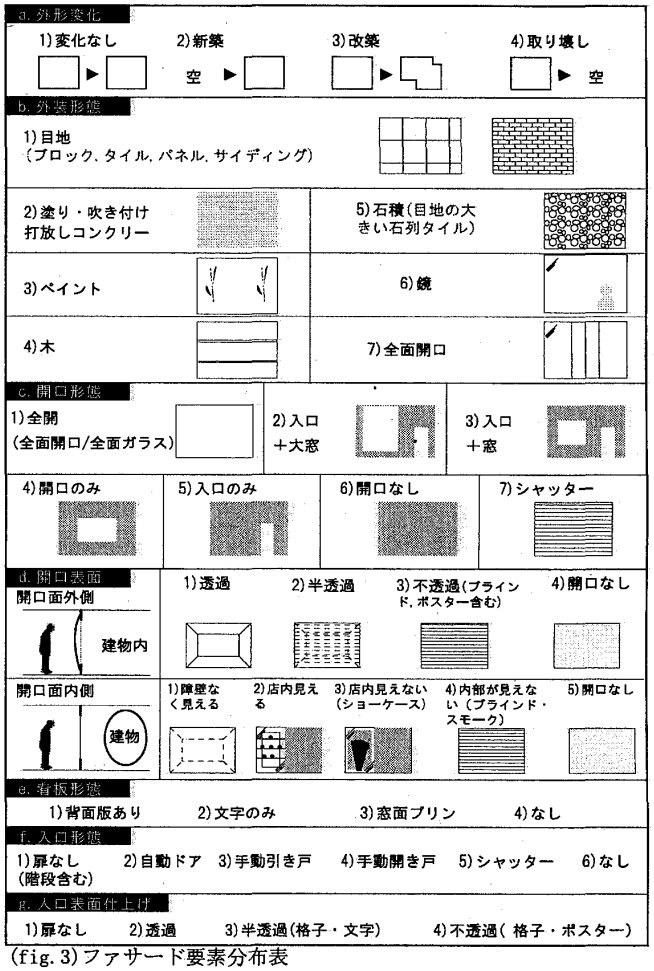
3. 調査と分析方法 2001年と2005年に撮影した古町通の連続立面写真を用いて、以前の写真と現在の写真を対応したデータシートを作成し、ファサードの形態に関する7項目で比較を行った（fig. 3）。古町通では一つの建物が複数の用途（テナント）で構成されているため、用途毎に1つの単位として、全用途を22種類に分け分析した。また2階部分は1階からアクセス可能なもの、看板が通りに面しているものを対象とした。

4. 用途の構成と変化 古町通全体の用途構成を空地（空き・駐車場）、私有用途（住宅・オフィス）、商業店舗（飲食系・食料品店・日用品店・服飾雑貨）の3タイプで各通の分布を見ると、11から13番町では住宅、8から9番町では飲食、4から5番町では服飾・雑貨がそれぞれ半数以上占めており偏りが見られた、その他の通りでは用途が混在しており、これが番町毎の性格となっている（fig. 4）。

用途の変化では特筆した変化は見られない。また2001年と2005年で古町通の用途分布を比較すると、用途の偏りと混在に変化はなく、古町全体の用途構成にも大きな変化は見られないと言える。



(fig. 1) 古町通周辺図



(fig. 3) ファサード要素分布表

5. ファサードの変化 ここでは7項目に分類したファサード要素の各タイプの変化について分析する（fig. 4）。

・外形変化 外形変化なしの例が全通りで96%近く占め

Transition of Street Scape Based on Facade and Tenants
-Comparison of old and new Photograph in Frumachi-dori , Niigata-

JU Liang, KAWAMURA Narimasa and IWASA Akihiko

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

、他の6項目が各テナントにおける表面的な要素であることから、古町通では通りの骨格が変わるほどの変化は起きていないことが分かる。

・外装形態の変化　外装形態では、塗り・吹きつけタイプへの変化が最も多い（fig. 5）。通り全体の構成では塗り吹きつけタイプ、目地タイプ、木質タイプが多いが、中心部では全面開口タイプが増えている。

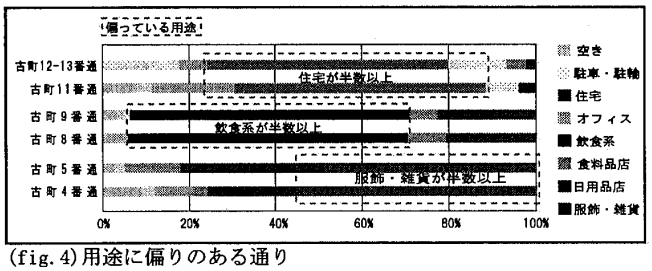
・開口形態、開口表面の変化　開口形態では全開タイプへの変化が最も多い。開口面外側では透過タイプへの変化が多く、開口面内側ではもの越しに店内が見えるタイプへ変化しているものが最も多い。また、これらのファサード要素の変化が多く見られる用途は服飾・雑貨、日用品店であった。全体の開口部構成を見ても、開口形態では全開タイプが最も多く、開口表面では透過性の高いタイプが比較的多いことから、古町通では服飾・雑貨、日用品店を中心に店舗が通りに対して開く傾向にあると言える。

・看板形態の変化　看板形態では看板なしへの変化が多い。これは上地区と下地区に多い住宅やオフィスといった看板のない用途があることと、ファサードに看板を持たず街路に看板を表出させる店舗があるためである。ファサードに看板のある例では、文字のみタイプへの変化が最も多いことが分かる。

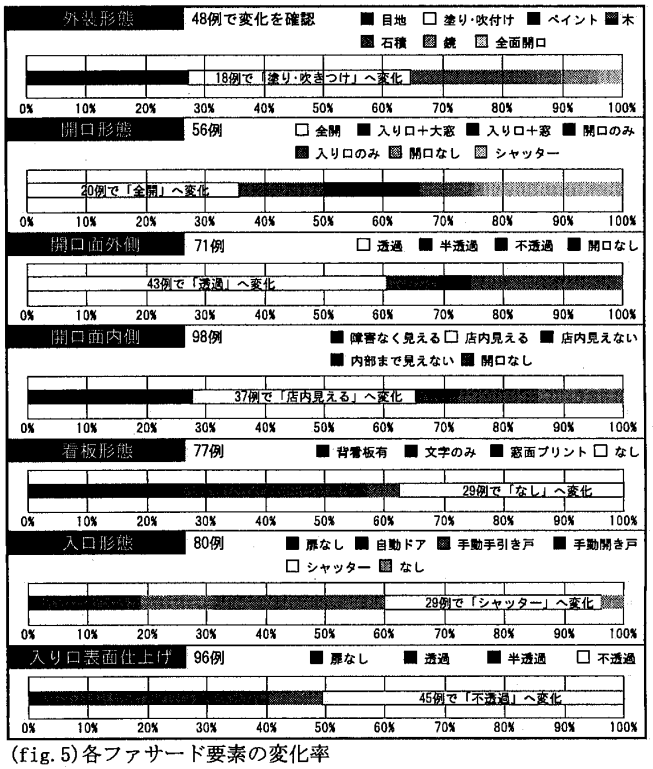
・入り口形態、入り口表面の変化　入り口形態ではシャッターへ変化するタイプが多く、入り口表面仕上げでは不透過への変化が多いことが分かる。開口部では通りに開く傾向が見られたものの、入り口ではこれに反していると言える。

6. 用途変化とファサード変化の関係　7つの比較項目に関して「全て変化なし」だったものは491例中291例あり（fig. 6）、下地区では約85%が「全変化なし」であったことから古町通の変化は上地区と中心部を中心に起きているといえる。また全体の用途変化率が16%であるうち、「1－2項目の変化」における用途変化率は18.4%、「3-4項目の変化」では50%、「5項目以上の変化」では95%以上で用途変化が見られることから、ファサード要素の変化が少ないほど、用途変化も少ないと言える。またファサード変化が多く見られる用途は服飾・雑貨、飲食系、日用品店などの商業店舗であることが分かった。

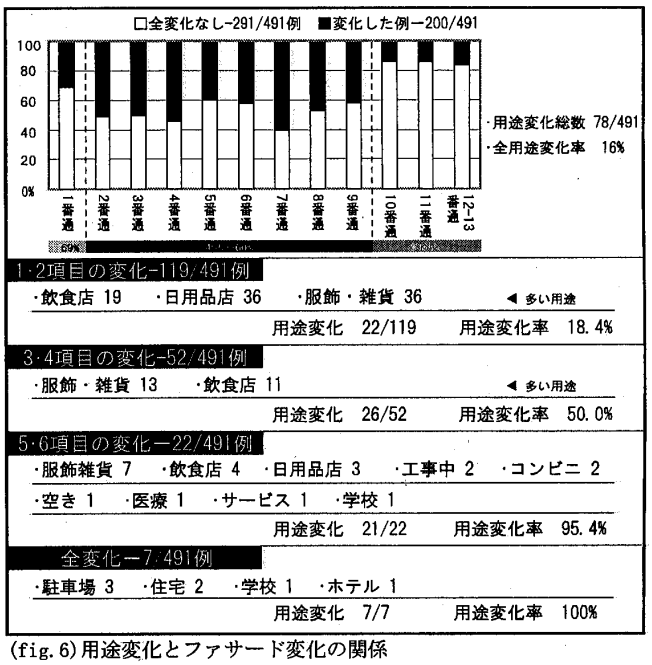
7. まとめ　古町通では用途が偏る番町と用途が混在する番町があるが、4年間の用途変化によってこの偏りと混在に変化は見られなかった。ファサードの変化では各テナントの表面的な変化が多く、通りの骨格や表情が一変することはない。また、服飾・雑貨と日用品店を中心にファサードが通りに対して開く傾向が見られた。ファサードの変化と用途変化の関係では、ファサード要素の変化が少ないほど、用途変化も少ないことが確認できた。



(fig. 4) 用途に偏りのある通り



(fig. 5) 各ファサード要素の変化率



(fig. 6) 用途変化とファサード変化の関係

＊新潟大学大学院自然科学研究科　博士前期課程
＊＊新潟大学工学部建設学科　助教授・博士（工学）
＊＊＊前田建設工業（株）　修士（工学）

Graduate Students,Graduate School of Science and Technology,Niigata Univ.
Assoc.prof.,Dept.of Architecture,Faculty of engineering,Niigata Univ.,Dr.Eng.
Maeda corporation.,M.Eng.

NII-Electronic Library Service